Slavic-Eurasian RESEARCH ENTER NEWS No. 166 November 2022

研究の最前線

2022年度冬期国際シンポジウム

「永久凍土:気候変動と資源開発は北極域の生活をどう変えているのか」の予告

12月14~16日にセンターの冬期国際シン ポジウム 「永久凍土: 気候変動と資源開発は 北極域の生活をどう変えているのか」が開かれ ます。主催は、センターの生存戦略研究プロ ジェクトに加えて、北極域研究加速プロジェク ト(ArCS II) の社会文化課題と海外交流研究 力強化プログラム「地域社会・開発・文化か らみた北極と東アジア連鎖」、東北大学東北ア ジア研究センターとなっています。ArCS IIは 2020年度から始まりましたが、その中間的な 成果発表の場となります。また、海外交流研究 力強化プログラムは東北大学、北海道大学、神 戸大学、ラップランド大学の関係機関で行っ ているため、今回のシンポジウムではラップラ ンド大学から数名の研究者を招いています。

永久凍土はシベリアや北欧の北極域に広が っており、ArCS IIではその自然環境の変化や そこでの人間生活の変容に関して重点的に研 究を行ってきました。特に近年の気候変動や 資源開発がどのような影響を及ぼしているか



について関心が高まっています。今回の国際シンポジウムでは、こうした関心に応えるような 報告が内外の第一線の研究者によってなされます。シンポジウムは対面のみで行われる予定 です。これまで北極域研究に馴染みのなかった人を含めて、多くの方の参加を歓迎します。プ ログラムは以下の通りです。「田畑」

Slavic-Eurasian Research Center 2022 Winter International Symposium Above the Permafrost: How Climate Change and Resource Development Are Changing Local Life in the Arctic

December 14 (Wednesday)

Junior Scholars' Session 16:00-18:00

Kathryn Tuyaara Yegorov-Crate (USA)

"Anti-War Mobilization and Resistance in Siberia"

Ruslan Shakhmatov (SRC)

"Effects of Snow Cover Manipulation on Larch Trees in the Taiga Forest Ecosystem in Northeastern Siberia"

Aleksandr Nogovitcvn (Hokkaido University)

"Historical and Spatial Variations in Siberian Larch Forest Conditions Before and After the Extreme Wet Event Shown by Satellite-Derived NDVI and Field-Observed Ecosystem Parameters"

Chair: David Wolff (SRC)

December 15 (Thursday)

Opening Remarks 10:30-10:40

Keynote Session 10:40-12:00

Matti Nojonen (University of Lapland, Finland)

"China and the Arctic: Can We Divulge a Strategy?"

Aileen Espíritu (UiT The Arctic University of Norway)

"Between a Rock and a Hard Place: Mining to Mitigate Climate Change"

Chair: Shinichiro Tabata (SRC)

Session 1. Sakha Land Use from Physical and Cultural Aspects 13:30-15:30

Alexander Fedorov (Melnikov Permafrost Institute, Siberian branch of Russian Academy of Sciences, Russia)

"The Present Trend of Changing Permafrost Landscape in Yakutia, Eastern Siberia"

Susan Crate (George Mason University, USA)

"Resilient Communities and Permafrost Thaw: From the Sakha Republic to the MacKenzie Delta"

Stanislav Saas Ksenofontov (University of Northern Iowa, USA)

"Sustainability of Arctic Social-Ecological Systems and Global Change: Indigenous Perspectives from Sakha"

Discussant: Hiroki Takakura (Tohoku University, Japan)

Chair: Masanori Goto (SRC)

Session 2. Economy and Environment in the Russian Arctic 15:45-17:45

Nadezhda Krasilnikova (Arctic Research Centre of Sakha Republic (Yakutia), Russia)

"The Factors Influencing Air Pollution in the Extractive and Energy Industries in the Sparsely Populated Regions of Russian Arctic"

Mayu Michigami (Niigata University, Japan)

"Urban Residential Problems in the Arctic Region of Russia: The Case of the Sakha Republic"

Kazuho Yokogawa (Kanagawa University, Japan)

"Public Services and Fiscal Problems in the Russian Arctic: The Case of the Sakha Republic"

Discussant: Masahiro Tokunaga (Kansai University, Japan)

Chair: Yuka Takeda (Kyusyu University, Japan)

December 16 (Friday)

Session 3. Revisiting the Indigenous Cultural Heritage 10:00-12:00

Lukas Allemann (University of Lapland, Finland)

"Co-creation of Oral Histories in the Indigenous Russian Arctic"

Yukari Nagayama (Kushiro Public University of Economics, Japan)

"Language and Life of the Peoples of Kamchatka: Personal Stories and Memories"

Korolina Sikola (University of Lapland, Finland)

"The Practice of the Right to Cultural Heritage Among Izhma Komi"

Discussant: Alyne Delaney (Tohoku University, Japan) Chair: Hiroki Takakura (Tohoku University, Japan)

Session 4. Hunting, Fishing, and Herding in Northern Cash Economy 13:30-15:30

Alex Oehler (University of Regina, Canada)

"Inner Asian Alpine and Subalpine Pastoralism in a Soiot Context"

Akihito Tachikawa (Mie University, Japan)

"12 Years after the Cohen Commission: Do the Kwakwaka'wakw Fishers Really Sell Out Their Licenses?"

Tuyara Gavrilyeva (North-Eastern Federal University, Russia)

"Features of the Food Systems in the Russian Arctic: The RISE Project Findings"

Discussant: Shiro Sasaki (National Ainu Museum, Japan)

Chair: Shiaki Kondo (Kobe University, Japan)

Session 5. Natural & Social Impacts of Permafrost Degradation and Its Future Projection 15:45-17:45

Takahiro Abe (Mie University, Japan)

"Permafrost Degradation near the Vicinity of Populated Towns in the Lena-Aldan Interfluve Revealed by Satellite Remote Sensing"

Timo Kumpula (University of Eastern Finland, Finland)

"Remote Sensing in Permafrost Degradation Monitoring in Fennoscandinavia and Yamal, Russia"

Tomonori Sato (Hokkaido University, Japan)

"Changes in Extreme Weather and Hydrological Cycle in Relation to Recent Climate Change"

Discussion: Yoshihiro Iijima (Mie University, Japan)

Chair: Stanislav Saas Ksenofontov (University of Northern Iowa, USA)

2022年度夏期国際シンポジウム-2 「ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力:新しい視点」を開催

センターは、「ロシアにおけるメロドラマとメロドラマ的想像力:新しい視点Melodrama and Melodramatic Imagination in Russia: New Perspectives」を今年度の夏の国際シンポジウム・パート2と位置づけ、8月1日(月)・2日(火)に開催しました。

このシンポジウムは、安達大輔准教授が研究代表者を務める科学研究費基盤研究(B)「ロシ



ア・旧ソ連文化におけるメロドラマ的想像力の総合的研究」および安達准教授の組織による2021年度スラブ・ユーラシア研究センター公開講座「メロドラマするロシア:アジアとの比較から考える大衆文化の想像力」に基づき、2021年8月にオンライン開催された第10回ICCEES大会で「メロドラマ的想像力を再考する」と銘打った4パネルに参加した海外研究者との協力によって企画されたものです。組織委員会には安達准教授のほか、センター発行の国際査読学術誌Acta Slavica Iaponicaの諮問委員を務めていただくなど関係の深いイリノイ・ウェズリアン大学名誉教授マリーナ・バーリナさんに加わっていただきました。

大衆文化研究にあたって欠かすことができない重要 テーマでありながら、ロシアや英語圏でもそれほど研 究が進んでいないロシア・ソ連のメロドラマ文化を新し い角度から理論的・体系的に読み直す試みは世界的に

見ても類例のないものです。一流の専門家の関心を幅広く集め、報告者には、スターリン時代のスローガンであった社会主義リアリズムの実態を鋭く分析したことで知られるカテリーナ・クラークさん(イェール大学)、ロシアのポストモダン文化研究の第一人者であるマルク・リポヴェツキーさん(コロンビア大学)、ソ連文化を舞台に独特の人類学を展開しているセルゲイ・ウシャーキンさん(プリンストン大学)などの超大家から、スターリン映画を身体論で分析するアンナ・トロポワさん(オックスフォード大学)、リアリズム文学研究の新しい世代を代表するヴァディム・シュナイダーさん(UCLA)やマルガリータ・ヴァイスマンさん(セント・アンドルーズ大学)といった若手まで、アメリカ・イギリス・ロシア・イタリアの錚々たるメンバーが名を連ねました。北海道大学の外国人招へい教員制度によるつながりも生かされ、2019年度にセンターに滞在したエヴゲーニ・ドブレンコさん(ヴェネツィア大学教授)、今年度の採用者であるキリル・ズプコフさん(ロシア高等経済学院)が、社会主義リアリズムにおける崇高からメロドラマへの変化、19世紀におけるメロドラマと検閲の関係といった、それぞれの滞在中のテーマを発展させた報告を行いました。国内の参加者も豪華で、バフチンとドストエフスキーの研究で著名な番場俊さん(新潟大学)のほか、学内から世界のサイレント映画を知り尽くしている小川佐和子さんにご参加いただきました。

シンポジウムでは近現代の様々な作品やジャンルが取り上げられ、トルストイ、ドストエフスキー、チェルヌイシェフスキーといった19世紀の古典文学、サイレントからスターリン時代の映画、社会主義リアリズム文学やソ連のポップソングまで、多岐に渡って充実した分析が繰り広げられました。これまで日本で取り上げられてこなかったトピックが提示されたことも特徴で、18世紀以降のロシアの児童文学の歴史を踏まえたバーリナさんの報告のほか、アレクサンドル&エレーナのプロホロワ夫妻(ウィリアム・アンド・メアリー大学)が最新のTVドラマを、ラリッサ・ルドワさん(ポモナ・カレッジ)がYouTubeのトーク番組を取り上げてロシア社会の問題と結びつけながら論じました。

各報告では、アイロニー・道徳・身体・検閲・ジェンダーなど現代的な視点から問題が立てられ、ロシアの文脈においてメロドラマ研究が持つ意味や可能性について熱心に議論されました。会場はセンター大会議室とZoomによるオンライン参加を併用して行い、二日間で約70名

の参加がありました。その半数近くが海外約10か国からの参加者であったことは、このシンポジウムの国際的な注目度を裏付けるものです。現在の世界情勢の中でロシア文学・文化研究にも根本的な見直しが求められていますが、国際共同研究を継続し発展させるというセンターの強い意志と組織力を内外に示すことができました。今後は、各報告を基に英語による論文集の刊行が予定されています。[安達]

ディビッド・ウルフ教授がフンボルト賞を受賞

センターのウルフ教授がフンボルト賞を北海道大学で初めて受賞しました。同賞は、ドイツ政府が全額出資するアレクサンダー・フォン・フンボルト財団が創設した、ドイツで最も栄誉ある学術賞です。これは、基礎的な発見、新しい理論あるいは発見が、当該研究領域を超えて永続的な影響を及ぼし、さらに、将来も優れた研究を生み続けることが期待される研究者に与えられます。これまで日本人では、小柴昌俊、村山斉、小林俊行、野水克己ら自然科学の研究者が受賞しています。

受賞はウルフ教授の30年間にわたる、20世紀ロシアのアジアにおける活動の歴史について

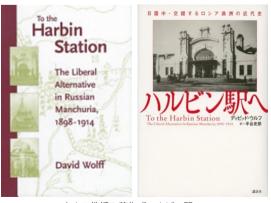
の研究に対するものです。同教授のハルビンに関する著作 (To the Harbin Station, Stanford, 1999/邦 訳『ハルビン駅へ』講談社、2014年)は、新しい帝国論の基礎的なテキストであると見なされており、従来は機密文書とされていた文書館史料による覇権主義の慣行についての、より広範で、きめの細かい分析に基づくものでした。同教授が編集あるいは共同編集された書籍や雑誌の特集号では、30人以上の日本人歴史家によるエッセイや論考を含む、多くの北東アジア研究の成果が英語圏の読者に紹介されました。ウルフ教授は、4つの大きなプロジェクトを



ウルフ教授

進めている最中で、これまでの研究よりもさらに影響力のある研究成果を出す可能性があると 見られています。

この10年間、ウルフ教授は、本学とルートヴィヒ・マクシミリアン大学(ミュンヘン)の間の



ウルフ教授の著作『ハルビン駅へ』

学術協定に基づいて、アジアにおけるロシア研究のために新たに設けられたポストの教授と緊密に協力してきました。これは、ロシア東方研究のためのヨーロッパで唯一の学術ポストであり、現在、ロシア医学史の著名な専門家であるアンドレアス・レンナー氏がこの教授になっています。ウルフ教授は、同大学で講義を行い、高等研究所を訪問し、同大学にスラブ・ユーラシア研究センターの2人のポスドクを派遣しました。さらに、同大学の北太平洋のイニシ

アティヴというテーマでモスクワのドイツ歴史研究所との間で研究協力を行い、ハイデルベルク大学の北太平洋に関する叢書の編集顧問を務めました。このようなドイツとの密接な研究協力も高く評価されました。

授賞式は、2023年6月にベルリンで開催されるドイツ大統領主催の晩餐会で行われる予定です。[編集部]

人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業 「東ユーラシア研究」プロジェクト始動

2022年4月1日、人間文化研究機構は、ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業として、「グローバル地域研究推進事業」を立ち上げました。「東ユーラシア研究」プロジェクト北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点(EES-SRC)は、この「グローバル地域研究」プログラムのもとに計画された、4つの地域研究プロジェクト「グローバル地中海地域研究」「環インド洋地域研究」「海域アジア・オセアニア研究」「東ユーラシア研究」のひとつを担うものとして、当センターに設置されました。

従来、地域研究は、東南アジア、中東といったように、近現代史的視点を軸とした地域を設定し、研究を蓄積してきました。しかし、政治、経済、社会、文化などさまざまな面でのグローバル化、ボーダーレス化が進む現代世界では、従来のあり方とは異なる空間連鎖が生じ、既存の「地域」にのみ注目して当該地域の基本的性格や構造を解明する研究はもはや成り立たなくなっています。その一方で、新たな形でのナショナリズムの高揚や地域の固有性の再発見や再創造といった動きも活発化しており、これがグローバル化のあり方にも大きな影響を与えるに至っています。グローバルに連関しあう経済や政治のあり方自体が地域の側から変容させられ、問い直される状況も生まれています。

こうした状況を受けて、人間文化研究機構は、これまで主にポストコロニアルな世界認識の下で想像(創造)された地域それぞれの固有性を内在的・本質的に明らかにすることに注力していた地域研究を刷新し、グローバル秩序の構築(とその失敗)と変容のメカニズムを、諸地域の比較と関連性という視点から総合的にアプローチするために、新たな地域研究として「グローバル地域研究」プログラムを立ち上げました。そのもとに、上記の4つのプロジェクトを設け、大学間の組織連携を含む、ネットワーク型地域研究を実施します。4つの地域は、それぞれの占める空間の環境特性、環境に適応した生業や生活様式、それらに根差しつつ形成された統治や経済の態様などを規定要因として長期的に独自の文化・文明を形成してきました。4つの研究プロジェクトはそれぞれの文明圏域の長期的持続と現代における展開の解明を独自の視点から推進します。また、これと同時に、これら圏域間のヒト・モノ・情報・価値の移動と交流による諸関係の様相を、総括班としての機能を果たす「グローバル地域研究」プログラムと協働しつつ解明し、開かれた関係性の中に形成される「地域」と「グローバル」像の動態を把握します。また、国際共同研究や次世代育成事業などをそれぞれのプロジェクト毎に推進するとともに、総括班による共通テーマの共同研究を実施します。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点が担う「東ユーラシア研究」の目的は、「東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイング」の解明にあります。ここでいう東ユ

ーラシアは、中国とロシア及び隣接するモンゴル・朝鮮半島・日本を中心として、その 隣接するないし関与する広域というゆるやかな地域概念を指します。事業の狙いは巨 大国家である中国とロシアを抱える東ユーラシアの存在がグローバル世界に及ぼす影 響力を、文化の衝突とウェルビーイング(幸福感)という視点で捉えようとすること、と くに政策や国際関係、経済のグローバル化を踏まえながらも、中国・ロシアおよびその 隣接国家に暮らす人々に焦点をあて、彼らの行う宗教、文化、経済、政治などにかかわる 活動が、いかなる文化衝突を引き起こし、また共生を生み出したのか、近現代史的背景を踏まえながら展開の実態を明らかにします。基軸となる問いは、異なる文化的背景 をもつ個人・集団が遭遇・交流することでどのような問題が発生し、解決されたのか(されなかったのか)、さらに彼らの幸福実現にむけた希望の社会的文脈を明らかにする ことです。

東ユーラシア研究では、さらに4つのテーマを設け、それぞれ担当拠点を設けて研究を推進します。テーマ1は「少子高齢化と葛藤」(神戸大学国際文化学研究推進センター拠点)、テーマ2は「宗教とサブカルチャー」(国立民族学博物館東ユーラシア地域研究拠点)、テーマ3は「マイノリティの権利とメディア」(東北大学東北アジア研究センター拠点)、テーマ4は「越境とジェンダー」(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター)です。それぞれの拠点組織の研究者を中心に、学内外の研究者がメンバーなる研究組織で運営されます。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点は、「越境とジェンダー」をテーマとし、ボーダースタディーズにおける境界付け([b]ordering)と空間に関わるスケールジャンプなどの手法を援用し、観光や就労、人身売買等を含めた域内外への人々の移動に焦点を当てます。移民の受け入れと送り出しは世界各地で生じている現象ですが、一帯一路構想のもとで、アフリカや北極域まで移動・移民する中国と、ロシアに流入する移民展開を追うと同時に、性差による分業やジェンダー規範のグローバル化等の視点を踏まえて、その場に暮らす人々の生活の視座からそれぞれの地域(コミュニティ)のあり方を解明します。またコロナ禍(ポストコロナ禍)における人とモノの移動を検証し、地域のあり方も展望します。

本拠点では、すでに述べたように、東ユーラシア地域を中心に、越境とジェンダーに関わる問題を軸として、ボーダースタディーズなどの理論的枠組を踏まえ、総合的かつ包括的な研究を進めます。日本、韓国、北朝鮮、中国、ロシア、モンゴル、台湾などの諸国・地域の諸問題を、国家レベルに集約することはなく、マクロなエリアとミクロなリージョンの位相差と多面性を念頭におき、様々なスケールにおいて分析します。さらに東ユーラシア地域を超えた諸問題と地域の相互作用や地域における比較などの視座も重視します。当該問題群に関しては、人文社会系の総合知といった観点から、学際的なアプローチを用いるとともに、実社会との共創に基づく、人びとの生活に対する貢献も射程に入れています。

本事業は2027年3月までの6年間にわたって実施されます。事業のさらなる詳細については、EES-SRC特設サイトをご覧ください。https://hokudaislav-ees.net/「井上

北大総合博物館展示「ボーダーツーリズム」リニューアル



常設展リニューアルに伴い、チラシも作成

境界研究ユニット(UBRJ) は、2022年9月27日から北 海道大学総合博物館(2階 ブース)の展示内容をリニュ ーアルしました。

今回の新展示「国境観光 ーツーリズム 未来への光 芒一」は、ツーリズムを創り、 育ててきた実務の方々の協 力を得て、その歴史を振り 返るとともに、新たな時代を 展望するための素材を集め ました。ツーリズムの誕生 から、観光を創る航空会社

の挑戦、観光を創るバス会社の挑戦、そして地域との共創について考えていきます。全 日空から提供を受けた貴重なモデルプレーンや機内誌、ツアーポスター、展示会場設 置モニターでは、宮崎交通から提供を受けた映像資料『みやざき―日南海岸』(東京フ ィルムズ、企画:宮崎交通、協力:全日空)、『観光宮崎四季シリーズ 夏編 太陽と遊 ぼう』(昭和41年頃の作品)、『えびの高原の四季』(企画:宮崎交通、制作:松崎プロ ダクション)をご覧いただけます。

また、稚内市在住の国境写真家・斉藤マサヨシ氏による、写真展「ボーダーツーリズ

ムの魅力『端っこから始まる旅』」シリーズ の「第2章 極北のロシアから中国シルクロ ードへ」も始まりました。「-67.8℃の町」べ ルホヤンスクからヤクーツク、イルクーツク、 ノボシビルスク、ウラジオストクを巡る旅で す。

境 界 地 域 研 究 ネットワー クJAPAN (JIBSN) の設立10周年を記念する特別展 示、国境標石、ミニ・コーナーも、リニュ ーアルしてありますのでお楽しみください。 モデルプレーンや機内誌、ツアーポスター (提供:全日空) [井上]



など貴重な資料が目白押し

ArCS IIによる北部ノルウェーの調査

北極域研究加速プロジェクト(ArCS II)の社会文化課題の第2班「エネルギー資源 開発と地域経済」では、ロシア北極域の資源開発地域において現地調査を行うことを 計画していましたが、ロシアによるウクライナ侵攻により、それが当面実施できなくな



ハンメルフェストの鳥瞰

ったことから、今年度は北部ノルウェーで現地調査を行いました。訪れたのは、ノルウェーのトロムソと、そこから北東に230kmほど離れているハンメルフェストです。この両地域は、ムルマンスクよりも緯度が高く、ハンメルフェストは北緯70度に位置しています。ハンメルフェストは、沖合150kmにノルウェー最大のガス田があり、そこから海中パイプラインで運んだガスをLNGに加工する施設を有

しています。ノルウェーは、電力生産のほとんどを水力発電で賄っており、このLNGや南部の沖合で採掘される原油の大半は欧州向けに輸出されています。ハンメルフェストには3日間ほど滞在しただけですが、我々が会って話をした役場の職員やビジネス関係

者は、口をそろえてLNGの生産の恩恵を語っていました。LNG企業の払う資産税や寄付により、新しい病院が作られ、教育施設に夜間照明が付けられるといった話、脱炭素にも関係するようないくつもの新たなプロジェクトの開始など、ウクライナでの戦争により経済関係の話はどこの国でも湿りがちになるなかで、久しぶりに明るい未来の話をたくさん聞くことができました。[田畑]



町役場での聞き取り

セルビア学士院セルビア語研究所との部局間協定締結

2022年9月27日(火)、スラブ・ユーラシア研究センター長がセルビア学士院セルビア語研究所を訪問し、同所長ソフィヤ・ミロラドビッチ氏と面会し、部局間協定書に署名しました。SRCとしては16番目の部局間交流協定となります。セルビア語研究所は1947年、当時の学士院長アレクサンダル・ベーリッチの主導でセルビア学士院内に設立された研究所で、もともとは1893年に前身セルビア王立学士院に組織された辞書編集部門に端を発する由緒ある研究所です。現在、同研究所は現代セルビア語研究・辞書編纂部門、古代スラブ語部門、語源部門、方言部門、標準語部門、デジタル部門の6部門を有し、約70人の常勤研究者および20人の連携研究者によって運営されています。SRCはバルカン地域の研究が他の分野



調印式を終えて。 向かって右がソフィヤ・ミロラドビッチ所長

よりも手薄で、蔵書も充実しているとは言えませんが、本来カバーすべき重要な領域であること に疑う余地はありません。現SRCスタッフの専門の近いところからにはなりますが、可能な限り 様々な分野を補っていく必要が強く感じられたため、これまでSRCと個人レベルで共同研究の 実績があったセルビア語研究所と連携することになりました。1923年はセルビア語研究所に かつて在籍した著名な言語学者ミルカ・イビッチ氏の生誕100年にあたることから、これを記念した研究集会を共同で組織することなどが検討されています。[野町]

2022年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定

2022年度の中村・鈴川基金奨励研究員は、以下の3名(五十音順)に決定しました。池澤氏はすでに滞在して充実した研究活動を行いました。「仙石」

氏	名	所 属	滞在期間	研究テーマ	ホスト 教員
伊丹	聡一朗	明治大学大学院 博士後期課程	2022.12.1 ~ 12.14	4-15世紀のモスクワ=ノヴゴロド抗争 におけるペルミの聖ステファンによる コミ宣教とノヴゴロド河川賊「ウシク イニク」によるヴォルガ川中流域進出	長縄
池澤	匠	東京大学大学院 人文社会系研究科 欧米系文化研究 専攻博士課程		ロシア連邦の軍事侵攻を受けたウクラ イナにおける言語イメージの変化	野町
廣田	千恵子	千葉大学大学院 博士後期課程	1	カザフ民族における手芸技法・装飾 習慣の変容動態に関する研究	宇山

第2回百瀬フェローの決定

百瀬宏・津田塾大学名誉教授のご寄付に基づき設立された百瀬基金による、第2回百瀬フェローがこの度、決定しました。百瀬フェローシップは、スラブ・ユーラシア地域を研究するテニュアを目指しているポスドクの方を対象とした研究奨励制度ですが、研究業績も一定の水準を満たし、研究計画もまとまった応募者から、センターで慎重に審議した結果、重松尚さんに2022年10月より、百瀬フェローの称号が与えられます。次会の募集でもひきつづき、多くの方々の応募をお待ちします。「岩下」

選考講評

採択者:重松 尚(しげまつ・ひさし)

研究課題名:リトアニアのソ連編入過程における非共産主義者に関する研究

重松氏は国際政治史を専門とし、特に戦間期のリトアニア政治・外交史を軸に中東欧をカバーする業績を出されています。重松氏は、「1930年代末リトアニアにおける反ユダヤ主義」(『東欧史研究』)、「リトアニア臨時政府(1941年)」(橋本伸也編著『せめぎあう中東欧・ロシアの歴史認識問題』ミネルヴァ書房)、「権威主義政権に対抗するファシズム体制構想」(『国際政治』)など、様々な角度からリトアニアの歴史の内実に切り込まれていま

すが、研究の白眉は「ファシズム」「ソ連」など外在的な政治のみに左右されない、リトアニア自身の主体的な力や運動の意義に光を当てた点にあります。この百瀬宏先生の「小国」研究を彷彿させる重松氏の研究アプローチとその実績が今回の選考の際、積極的な支援を受けた理由でした。また重松氏は、近年、デジタル・ヒューマニティーズの観点から、戦間期リトアニアの統計データのデジタル化も積極的に進められており、データサイエンスと人文学をつなごうとする意欲ももたれています。百瀬フェローとしての研究課題は、リトアニア「人民政府」が共産党一党体制へ移行し、ソ連に編入されていく過程のなかで、彼らがどのように「主体的」にこれに関わったのかというものですが、その成果も踏まえた単著の刊行が期待されます。

採用にあたっての抱負

重松 尚

この度、第2回百瀬フェローに採用していただきまして、大変光栄に存じます。また、審査者の皆様に厚く御礼申し上げます。

私はこれまで、リトアニアのナショナリズム運動の歴史や現代リトアニアにおける歴史記憶の問題などに取り組んでまいりました。博士論文では、第二次大戦期にソヴェトと対抗すべくナチ・ドイツと協力したリトアニア人勢力の政治思想などについて、その形成過程を両大戦間期に遡って考察いたしました。



今回の百瀬フェローシップでの研究では、ほぼ同時期にソヴェト政府と協力したリトアニア「人民政府」に関する研究を行う所存です。ナチ・ドイツと協力した勢力とソヴェト政府と協力した勢力――両者の立場は正反対であったように思えますが、実際の関係はより複雑でした。1940年6月、リトアニアがソヴェト政府からの最後通牒を受け入れたことで体制転換が起こります。その際、表向きには、それまでの権威主義体制がリトアニアの人民の手によって倒されたこととされたため、体制転換後に成立した「人民政府」には共産主義者以外にもさまざまな立場の者が加わりました。したがって、「人民政府」の内部には、リトアニアのソヴェト体制への移行に否定的な者もいたのです。しかし彼らは、ソヴェト政府の圧倒的な力を前になすすべもなく、リトアニアでソヴェト化が進み最終的にソヴェト連邦に編入される過程で、国外へと逃れる者も多くいました。そして、その一部が、ソヴェトに抵抗しナチ・ドイツと協力しながらリトアニアの独立を回復しようと活動していた亡命勢力に加わることになります。

本研究では、「人民政府」における非共産主義者がソヴェト連邦編入を阻止するためにどのような新国家構想を描き、リトアニア人共産主義者やソヴェト政府とどのような関係をもっていたのかについて、調査を行います。そのなかで、リトアニアが大国のリアルポリティークに飲み込まれようとしていた当時、彼らがどのようにして自国の権益を守ろうと動いていたのか(そしてそれに失敗したのか)が明らかになるでしょう。そこから、百瀬宏先生がこれまで取り組んでこられた小国研究につながるような論点も見えてくるのではないかと考えております。この1年間、百瀬フェローの名に恥じぬ研究を行う所存です。どうぞよろしくお願いいたします。

清沢紫織非常勤研究員が北大部局横断シンポジウムで受賞

2022年10月28日(金)に開催された第8回北海道大学部局横断シンポジウムにおいて、清沢紫織非常勤研究員が研究題目「複数中心地言語としての現代ベラルーシ語:対立や分断を超える言語のあり方を考える」について報告し、ベストプレゼンテーション賞を受賞しました。部局横断シンポジウムは北海道大学内の若手研究者の交流と融合研究の創成を目的とするもので、今年も新進気鋭の若手研究者らが報告を行いました。清沢非常勤研究員のますますの活躍が期待されます。[村上]

第17回スラブ言語学会 (SLS-17)を終えて

2022年9月19日(月)~21日(水)に上記の国際学会が組織・運営されました。本学会は2006年に組織された国際学会で、従来はヨーロッパと米国が隔年で組織されてきましたが、今回は初めてのアジア開催となりました。実際には昨年開催されるはずでしたが、コロナ禍ゆ



討論に参加する Friedman 氏 (隣は向かって左から Gvozdanović 氏、Danielewicz 氏)

えに、ヨーロッパとも米国とも時差が大きい日本でのオンライン開催は困難であるため、翌年の日本開催に期待して、急遽イリノイ大学アーバナ・シャンペーン校が担当しました。しかしながら1年後も、コロナ禍は幾分改善したとはいえ、外国人を大勢受け入れるような環境には戻らず、またロシアのウクライナ侵攻のため様々な調整が必要となり、関連SNS上ではウクライナ人とロシア人が対立し、学会執行部と組織委員会での意見のすり合わせ、また組織委員会への問い合わせで対応を迫られるなど、開催直前まで苦労の連続

でした。そのような中でも、世界的にスラブ言語研究をけん引してきた基調講演者5名(Victor Friedman氏、Jadranka Gvozdanović氏、Michael Moser氏、Magdalena Danielewicz氏、Danko Šipka氏)は来日を果たし、また多くの日本在住の研究者は対面参加しました。ヨーロッパからの参加者が多く、ヨーロッパ時間を基礎としたため、組織委員は、午前中に各自の本来の業務を行い、午後2時から午後11時までは学会に従事するということで、負担もそれなりにありました。大きなトラブルも生じることなく、与えられた条件のなかで充実した国際学会となり、出席者から高く評価され、多くの感謝の言葉を受けました。

この学会組織に立候補した2017年には「そもそも日本にはまともなスラブ語学者がいて、こういった学会を組織できる団体があるのか」という質問が理事会で公然と出されていましたから、様々な困難にもかかわらず内容・運営ともに申し分のない学会組織を終えることができて何よりでした。報告応募者は約130件、採用は90件程度、最終的にはキャンセルも出ましたが、スラブ言語学の多様な分野から80件強のレベルの高い報告が行われました¹。9月21日にロシアで発動された「部分的動員令」への対応からキャンセルする者も出るなど、最後まで予

¹ プログラムはこちらをご覧ください。

https://www.slaviclinguistics.org/about-the-sls/previous-conferences

想外のことに振り回された学会となりました。

組織自体はSRCが中心となりましたが、文学研究院の藤田健院長をはじめ、同院の菅井健太先生、アイヌ・先住民研究センターの丹菊逸治先生、メディア・コミュニケーション研究院の橋本聡先生やその他の皆様からの多大なご支援とご理解がなければ成功はなかったと思います。ここに改めてお礼申し上げます。SLS-18は2023年9月にブラチスラバで開催されます。「野町」



基調講演を行う Moser 氏

キルギス共和国日本語教師会による国際研究大会の開催

今年は、クルグズスタン(キルギス)を含む中央アジア諸共和国と日本の間の外交関係樹立から30周年となりました。これを記念して2022年8月20日(土)に、キルギス共和国日本語教師会の主催で「日本語教育と国際関係」というテーマで国際研究大会がオンラインで行われました。本研究大会には、センター非常勤研究員のベクトゥルスノフ・ミルランが実行委員会の委員と報告者として参加しました。研



国際研究大会のポスター

究大会では、クルグズスタンにおける日本学と日本語教育、また日本との経済、社会、文化関係の歴史と現状について充実した研究報告が行われました。ベクトゥルスノフ研究員は日本の中央アジア研究の動向について、話題作を中心に話をしました。また、センターからは宇山智彦教授も基調講演者として参加し、日本の中央アジア外交の歴史と現状について興味深いご報告をいただきました。宇山教授は、国際秩序が不安定化している中で、日本は、中央アジア諸国に対してグローバルな課題に共に取り組む方向性を打ち出していることや、「法の支配に基づく自由で開かれた国際秩序」の重要性を強調する機会が増えていることについて述べました。

この場を借りて、本研究大会の実現に力を注いてくださった大会実行委員長のママーシェワ・ジィデグーリ氏と、キルギス日本語教師会の皆様にお礼を申し上げます。 [ベクトゥルスノフ]

専任研究員セミナー

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

専任研究員セミナー

7月26日:田畑伸一郎 報告:経済制裁とロシア コメンテータ:金野雄五(北星学園大学経済学部)

ロシアのウクライナ侵攻に対して西側が課している経済制裁のロシアへの影響とロシアの対応 を、簡潔に論じたペーパーです。工業生産の減少、インフレ、財政の変調、レートの変動を統計 データで示し、今後、石油・ガスの中国・インドなどへの輸出増は西側への輸出減の一部しかカ バーできないので、石油・ガスに依存する経済発展モデルは成り立たなくなり、輸入代替と農産 物・食品の輸出振興を促進する政策が取られると予測しています。また、財政赤字が増大・継 続し、国民福祉基金が底をつけば、国債発行で賄っていくほかなくなるという、2000年代以降に はなかった状況が生まれるだろうと指摘しています。コメンテータからは、石油・ガス収入と為 替レートの関係や、展望を考える際のタイムスパンの設定の重要性などに関する指摘が出されま した。他の参加者は、ロシアがデータを隠したり改ざんしたりする状況での研究の進め方、ヨ ーロッパのガス輸入における「脱ロシア」の難しさ、中国からの技術移転の可能性と、中口が団結 する政治的意思が存在するか否かの問題、石油の買い手などとしてインドが持つ役割の重要性、 国際的に食糧安保や農業の持続性・安全性が重視される中でロシアが農産物・食品輸出を増 やす際に予想される困難、ロシアは2014年頃から既に戦争に向けて経済的な準備をしてきた のか、現在は戦時経済体制になりつつあると言えるのかなど、多様な論点を提起しました。なお、 本ペーパーをもとにした論考が、雑誌『国際問題』2022年10月号に掲載され、センターのウェ ブサイトの「ロシアのウクライナ侵攻特集」コーナーからもリンクされています。「宇山」

研究会活動

センターニュース165号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです(国際シンポジウムを除く)。[編集部]

7月5日 SRCセミナー Gabriela Múcsková (Ľudovít Štúr Institute of Linguistics SAS, Slovakia) "Slovak Dialects Revitalised - In New Functions and in the Folk Linguistics"

7月8日 SRCセミナー Ranko Matasović (University of Zagreb / SRC) "The Etymology of the Ethnonym *Hrvat* 'Croat'"

7月11日 SRCセミナー Greg Yudin (Moscow School of Social and Economic Sciences) "Do Russians Support Putin?"

7月19日 SRCセミナー Alyssa DeBlasio (Dickinson College / SRC) "Russian Film of the Putin Era: Politics, Profits, and Patriotism"

7月21日 Special Seminar Alyssa DeBlasio (Dickinson College / SRC) "The Philosophical Origins of the "Russian Idea': What Can Dostoevsky Teach Us about Russia's War against Ukraine?"

7月22日 SRCセミナー Edyta Bojanowska (Yale University / SRC) "Japan through a Russian Imperial Lens: Ivan Goncharov's The Frigate Pallada (1858)"

7月23日 ワークショップ 「ウクライナ侵攻後の世界経済:ロシア・中国・インド(2) 第1セッション「世界経済とロシア・中国・インド」:星野真(駒澤大学)「中国の国際収支と人口構造 ロシア・インドとの比較」、大野成樹(旭川大学)「ロシア中銀の為替・金融政策」、日臺健雄(和光大学)「ロシアの外貨準備とソブリン・ウェルス・ファンド:ウクライナ侵攻前後の動向を中心に」、佐藤隆広(神戸大学)「インド経済のGVCへの参入」 第2セッション「近年の中国・インドの社会経済状況と今後の展開」:福味敦(兵庫県立大学)「インドのエネルギー政策」、二階堂有子(武蔵大学)「人口ボーナス期にあるインドの課題―小規模女性企業を中心に」、梶谷懐(神戸大学)"Experiences of the Cultural Revolution and the Mental Health of Middle-aged and Older Adults"

7月27日 SRCセミナー Tomasz Kamusella (University of St Andrews / SRC) "Where Does Central Europe Terminate in the North and the South?"

7月28日 SRCセミナー Ranko Matasović (University of Zagreb / SRC) "The Typology of Standard Slavic Languages and the Standardization of Croatian"

7月29日 SRCセミナー Ирина Озерная "Юрий Олеша и творческая интеллигенция в контексте времени: 1920-е-1940-е годы" [イリーナ・オズョールナヤ「ユーリー・オレーシャと芸術家たちの時代: 1920-40年代]

8月1日 SRCセミナー Ирина Озерная "Родословная и одесский период жизни Ю.К. Олеши (1902–1921)" [イリーナ・オズョールナヤ「ユーリー・オレーシャの系譜とオデーサ時代 (1902–1921年) |]

8月3日 SRCセミナー Maja Matasović (University of Zagreb) "Croatian Literature in Latin and Its Reception Abroad"

8月5日 ラウンドテーブル "Childhood in Russia: Yesterday and Today. New Approaches to Children's Literature and Culture" Kirill Zubkov (SRC), Anna Toropova (Oxford University), Marina Balina (Illinois Wesleyan University)

8月8日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 池澤匠(東京大学大学院)「ロシア連邦の軍事 侵攻を受けたウクライナのメディアにおける言語イメージの変化」

8月8日 ラウンドテーブル "Языки войны в русской культуре XIX – XXI веков: преемственность или конфликт?" [19–21世紀のロシア文化における戦争の言語:継承か対立か?] Кирилл Зубков (SRC), Евгений Добренко (Università Ca' Foscari di Venezia), Сергей Ушакин (Princeton University) [キリル・ズプコフ (SRC)、エヴゲーニ・ドブレンコ (ヴェネツィア大学)、セルゲイ・ウシャーキン (プリンストン大学)]

8月12日 SRCセミナー 當山奈那(琉球大学)「琉球列島の言語再活性化と言語記述」

8月22日 SRCセミナー Павло Гриценко (Інститут української мови НАН України) "Мовна ситуація в Україні: сучасний стан і візії майбутнього" [パヴロ・フルィツエンコ教授 (ウクライナ国立学士院ウクライナ語研究所)「ウクライナにおける言語状況: 現状と展望」]

8月22日 北大ARC-SRC特別セミナー 「ウクライナ侵攻のインパクト―北極の経済、産業、政治及び科学」 第一部 経済・産業:田畑伸一郎 (SRC)「ウクライナ侵攻のロシア経済への影響」、服部倫卓 (ロシアNIS経済研究所)「ウクライナ侵攻後の日口経済関係」、原田大輔 (石油天然ガス・金属鉱物資源機構)「ウクライナ侵攻と欧米制裁がもたらすロシア北極域資源開発への影響」、大塚夏彦 (北海道大学北極域研究センター)「ロシアによるウクライナ侵攻と北極海航路」;第二部 国際政治・科学:大西富士夫 (北海道大学北極域研究センター)「北極域をめぐる国際情勢と地政学環境へのインプリケーション」、榎本浩之 (国立極地研究所)「北極における科学協力の今後」、Marina Lomaeva (北海道大学北極域研究センター)「ロシアによるウクライナ侵攻後の日口学術交流の現況」

8月30日 SRC 新刊講評会 Etimološki rječnik hrvatskoga jezika [クロアチア語語源辞典刊 行に寄せて] 報告者: Ranko Matasović (University of Zagreb / SRC), Dubravka Ivšić Majić (Institute for the Croatian Language and Linguistics), Tijmen Pronk (Leiden University); 討論者: Nikola Vuletić (University of Zadar), Harald Bichlmeier (Martin Luther University Halle-Wittenberg)

8月31日 北海道中央ユーラシア研究会第142回例会 松元晶(北海道大学大学院)「現代カザフスタンを形作るもの」

9月1日 百瀬フェローセミナー 貞包和寛「戦間期ポーランドの言語政策に関する基盤研究 いわゆる 『クレスィ諸法』を中心として」

9月8日 SRCセミナー Борис Норман (Минск) "Загадки славянской возвратности" [ボリス・ノルマン (元・ベラルーシ国立大学)「スラブ諸語における再帰性の謎」]

9月15日 Book Talk David Wolff (SRC) "Sugihara Chiune and the Soviet Union: New Documents, New Perspectives"

9月27日 EES/UBRJ 実社会のための共創研究セミナー 田村慶子(北九州市立大学)「東南アジアのジェンダー」

9月29日 EES/UBRJ 実社会のための共創研究セミナー 斎藤慶子(大阪公立大学)「ロシアバレエとウクライナ侵攻」

10月3日 SRCセミナー Лариса Масенко (Інститут української мови НАН України) "Суржик в комунікативному просторі України: між мовою і язиком" [ラルィサ・マセンコ (ウクライナ国立学士院ウクライナ語研究所)「ウクライナのコミュニケーション空間におけるスルジク:「モーバ」と「ヤズィク」の間で」

10月7日 第42回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 仙石学 (SRC) 「ポーランドとウクライナー複雑な両国の関係を読み解く」

10月7日 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター/京都大学東南アジア地域研究研究所/東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「戦略的パートナーシップ協定」記念セミナー「ロシアのウクライナ侵攻・『ポスト冷戦』は終わったのか?:ラテンアメリカ・中東・旧ソ連の経験から」 岩下明裕(SRC)「ソ連解体とウティ・ポシデティス体制としての『ポスト冷戦』、村上勇介(京都大学東南アジア地域研究研究所)「ラテンアメリカにおけるウティ・ポシデティ

スの成立と適用」、黒木英充 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 「中東の視点から」

10月8日 EES/UBRJ 実社会のための共創研究セミナー 「バレエとウクライナ侵攻: ウクライナから避難したダンサーを迎えて」 スヴャトスラフ・リプコ (ソロヴィヤネンコ記念ドネツク国立アカデミック・バレエ劇場バレエダンサー)、オレクサンドル・リプコ (ソロヴィヤネンコ記念ドネツク国立アカデミック・バレエ劇場バレエダンサー)、斎藤慶子 (大阪公立大学・特任講師)「ウクライナのバレエ史概略および侵攻後のドンバス・オペラの活動」

10月11日 北海道中央ユーラシア研究会昼食懇談会 宇山智彦 (SRC) 「カザフスタン出張報告: 改革の実状、ロシアの戦争の波紋、民族運動への歴史認識」

10月12日 SRCセミナー "Мир кино Центральной Азии: со съемок фильма совместного производства с Японией" [「中央アジア映画の現在:日本との共同制作の現場から」] Актан Арым Кубат (Кыргызстан), Shinju Sano (Japan) [アクタン・アルム・クバト (クルグズスタン)、佐野伸寿 (日本)]

10月13日 SRC客員研究員セミナー Mauricio Borrero (St. John's University) "Vasillii Oshchepkov and the Japanese Roots of Soviet Martial Arts, 1893–1938"

10月18日 SRCセミナー Tilmann Reuther (University of Klagenfurt, Austria) "On language codes in Ukraine: the case of Suržyk"

10月20日 SRCセミナー Ryan Tucker Jones (University of Oregon) "Red Leviathan: The Secret History of Soviet Whaling"

10月21日 **客員研究員セミナー** 金野雄五(北星学園大学)「ウクライナ侵攻後のロシアの石油・ガス輸出をめぐる動向」

10月25日 EES/UBRJセミナー Magdalena Grabowska (Institute of Philosophy and Sociology, Polish Academy of Sciences) "Ukrainian Refugees and Polish Women's Organizations"; "Gender problems before and after the Regime Transformation in Poland"

10月26日 SRCセミナー Эльза-Баир Гучинова (приглашенный научный сотрудник Муниципального университета Кусиро) "Стратегии выживания в автобиографическом нарративе о жизни в СССР (рассказы Масао Миура (1946–2002), воспоминания японских военнопленных о жизни в советских лагерях (1945–1956), устные истории о депортации калмыков (1943–1957))"

10月31日 SRCセミナー Dorota Rembiszewska (Instytut Slawistyki PAN) "Próby rewitalizacji gwar mazurskich jako nowa tendencja w podejściu do polskich gwar ludowych"

11月2日 SRCセミナー Oksana Bulgakowa "Soviet Film Factory of Gestures, Bodies, and Voices"

人事の動き

服部倫卓教授の着任

2022年10月からロシア、ウクライナ、ベラルーシを主なフィールドとする経済学者の服部倫卓氏が教授としてSRCに着任されました。これは2023年3月にSRCの経済研究を支えてきた田畑伸一郎研究員が定年退職するため、その引継ぎを見据えた後任の人事ということになります。服部氏はロシアNIS貿易会・ロシアNIS経済研究所で長年研究活動を行い、当該領域の研究にとどまらず、中国をはじめとした他地域との比較研究でも独自性の高い目覚ましい成果をあげてこられました。とりわけ日本でのベラルーシ研究の第一人者として著名で、専門の中心である経済にとどまらず、視野の広い地域研究者として、社会問題、政治、歴史、文化、ナショナリズムなどについても深い見識をお持ちです。発信力も際立っていて、学



服部倫卓教授

術論文や報告書といった専門家向けだけのものではなく、一般向けの情報発信においても質・量ともに定評があります。とりわけロシアのウクライナ侵攻以来、業界での服部氏のプレゼンスと評価はますます高くなっていると言っても過言ではありません。

これまで服部氏は主に国内を対象とした実務者として膨大なキャリアを積んでこられましたが、今後は従来の活動に加えて、海外の学界に向けた最先端の研究成果の発信や大学教育への貢献が求められます。しかし服部氏がいずれにも柔軟に対応されることに疑いありません。とりわけ実務者としての視点は学生指導にも重要な意味を持つでしょう。また、服部氏はロシアNIS経済研究所で長い間幹部として指導的な立場を担われ、2020年からは所長をお務めでした。これまで様々な企画立案を実現させてきた優れた組織者として、研究・組織の両方においてSRCの長所をさらに強化し、弱点を補ってくださると確信しております。[野町]

教員・研究員の異動

井上 岳彦 特任助教 2022年8月1日(採用) 服部 倫卓 教授 2022年10月1日(採用) SHAKHMATOV, Ruslan 博士研究員 2022年10月1日(採用)

事務職員の異動

大間知 亜紀 事務補佐員 2022年7月1日 (採用) 徳永 浩則 研究支援推進員 2022年9月18日 (退職)

学界短信

学会カレンダー

		1
2022年	11月19日	地域研究コンソーシアム2022年度年次集会・一般公開シンポジウム 於岐阜女子大学(オンライン併用) http://www.jcas.jp/about/nenji.html
	12月14-16日	スラブ・ユーラシア研究センター 2022年度冬期国際シンポジウム 於SRC
2023年	2月13-18日	3rd ABS (Association for Borderlands Studies) World Conference 於ベングリオン大学 https://world.absborderlands.org/
	3月31日 - BASEES (British Association for Slavonic and East European Studion により という	
	ABS (Association for Borderlands Studies) Annual Conference 於アリンナ州テンピ https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/	
	5 月後半 (日付未定) 27th Annual World Convention of the Association for the Study o Nationalities (ASN) 於コロンビア大学 https://www.asnconvention.com/	
	6月(日付未定)	比較経済体制学会第63回大会 於神奈川大学 http://www.jaces.info/info.html
	10月21-22日	日本ロシア文学会第73回全国大会 於富山大学五福キャンパス https://yaar.jpn.org/
	11月10-12日	日本国際政治学会2023年度研究大会 於福岡国際国際会議場 https://jair.or.jp/
	11月30日- 12月3日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於フィラデルフィア https://www.aseees.org/convention

大学院修了者の声

大学院での7年間

ベクトゥルスノフ・ミルラン(センター非常勤研究員)

2022年9月26日に博士号(学術)を取得しました、クルグズスタン出身のミルランと申します。博士号を取得する夢も予定もありませんでした。1993年に小学校に入学してから、中学校、高校、大学の学部、修士課程、博士課程を経て2022年にやっと「公的教育を受ける」ことを終わりました。「ミルランはいつまで学生を続けるのかな」と、近年親戚や知り合いから色々と心配される声も聞こえていましたので、無事に修了してほっとしているところです。

2013年に学部を卒業し、2007年から働いていたクルグズ共和国国立放送局でのキャリ

アを続けようと思っていたところ、たまたま日本の文部科学省の奨学金制度に合格してしまったことが分かりました。他の優秀な候補者と比べて日本語のレベルがあまりにも低かったため、期待していなかったのですが、修士課程の研究計画書が評価されたと、後に言われました。2年間修士課程でより深い知識を追求しようと思い、2015年4月に北海道大学大学院に入学したわけです。当時一人暮らしの母との約束では留学期間は2年間だけだったので、博士課程に進む考えもありませんでした。しかし、2年間の予定は結局博士課程まで続いて、7年間に延びました。

厳密に言えば、北海道大学大学院文学研究科の歴史地域文化学専攻に属していた私たちは、自分たちをスラブ・ユーラシア研究センターのものとして意識していました。院生室はセンターの中にあり、一日中センターの中で過ごすことになりますので、文学研究科への所属意識は全くありませんでした。

当初の院生室はとても賑やかな場所でした。私と同じ時期に修士課程に入学した方々がかなりいましたので、院生室で半分ロシア語、半分日本語で色々と話し合う機会が多くありました。ロシアの思想家イワン・イリインの研究に熱心だった北村宣彦さん、ロシア標準文語の歴史を研究していた佐々木祐也さんたちと仲良くなり、私の下手な日本語を直してもらっていました。

院生室と言えば、先輩のアセリ・ビタバロヴァさんについての思い出が深いです。カザフ人のアセリさんと私の関心はなんと言っても中央アジア諸国の現代政治でした。タジキスタン、クルグズスタン、カザフスタンと中国の外交を研究していたアセリさんと時々時間を忘れるほど、我々の出身地域でおきていた政治と社会問題について話し合っていました。彼女と話をするのがあまりにも楽しかったので、途中で、研究テーマとして政治を選んだほうがよかったかもと一時的に後悔していたときもありました。

2014年10月10日だったと思います。その前の日に札幌に到着し、翌日の午後2時頃に指導教員として私を受け入れてくださった宇山智彦先生と最初の面談でした。当時、私はかなりオープンな性格で、自分が言いたいことがあればはっきり言うタイプの人だったのですが、なぜかその日に宇山先生の研究室に入った途端黙ってしまいました。目の前に座った宇山先生は目を離さずずっとこちらを見極めていました。少し挨拶を交わした後、「どのようなテーマに興味がありますか」と聞かれました。とにかく色々なテーマに関心があることを見せないといけないと思い、なぜか「バルカン諸国の歴史と政治に関心があります」と答えてしまいました。その時に頭の中で色々なことがありましたが、なぜか一番思っていなかったことを言い出してしまった不思議な瞬間でした。自分がどれほど色々な地域と問題に関心があるのかを見せたくて、恰好つけて、中央アジアの専門家の前に来て、バルカン地域の話をして失敗したなぁと、後に自分の中で解釈していました。

その後、時間をかけて宇山先生と相談した結果、母国クルグズスタンの歴史をやることになりました。スラブ・ユーラシア研究センターは院生の研究を支えるために独自の院生助成制度を設けています。修士課程2年目にこの制度を使って、モスクワとビシケクの文書館で現地調査をすることができ、修士論文を執筆する上で重要な史料を収集してきました。修士論文を書いていて、誰かの解釈を通して過去の出来事を見るのではなく、その出来事に直接に触れられたことに感動していた日々を今も覚えています。修士論文ではソヴィエト・クルグズスタンの形成を、当時のクルグズ人の政治・文化エリートを中心に整理しました。

修論を書いていた時期に自分のことを初めて「研究者」として意識し始めました。修了

するのか分からないまま、とりあえず博士課程に進 学してみることを決めました。もらっていた奨学金 をまた3年間延長することができたので、それもこ の判断に大きく影響しました。

博士課程の生活は、責任の重さや目の前にある課題からすれば、社会人の生活とほぼ変わりありません。とりあえず研究業績(論文投稿と学会発表)を作るのに必死です。夏休みや冬休みという感覚もありません。少なくとも私の場合はそうでした。修士課程の2年目に上の娘が生まれましたので、娘が3歳になるまでに私も博士論文を完成させようと甘く考えていました。

スラブ・ユーラシア研究センターのいいところは、 研究施設としてすべての教材と機械が揃っていると いう点にあります。いつか母国に帰る時に運ぶのに 困るのでと思って、敢えて紙媒体で本を集めていま



博士論文を持つ筆者

せんでした。図書館から借りてきて、センターの2階の情報機器室でスキャンしていました。昼ご飯を食べた後に眠くなるので、昼食後必ず2階のコピー機の隣に立っていました。「こんなに賢いスキャナーはないだろう」と思いつつ(印刷とスキャンを同時にできるので他の人の邪魔にならなかったからです)、30分で200頁の本をスキャンできるスピードまで到達していました。文献は、附属図書館の1階にあるスラブコレクションから借りてきていました。ビシケクでも簡単に手に入らないような文献が目の前に並んでいて、最初は不思議な気がしていました。今までにこのコレクションの蓄積に貢献してきた前の世代の先生方に深く感謝したいと思います。中央アジアの社会・歴史・文化に関する重要な文献と一次資料が揃っていて、中央アジアの研究者にとって完璧な環境です。

一番驚いたのは、スラブ・ユーラシア研究センターの図書室のマイクロフィルムをコピーできる機械でした。帝政ロシアやソ連初期の新聞と雑誌などがマイクロフィルムで保存されており、100年以上前の資料を見たければ、欲しいテキストを見つけて、ワン・クリックで紙に印刷し、読めるという仕組みです。モスクワのロシア国立社会政治史文書館(RGASPI)で作業した際に、道具が壊れていたのでマイクロフィルムをペンで前と後ろに回し、料金が高くてコピーもスキャンもできない状況で、一日中ずっと手で書いていたことと比べて、センターの図書室はパラダイスのような施設だと思います。

スラブ・ユーラシア研究センターは研究施設として優れていることがよく知られていることですが、研究施設はその中にある研究コレクションや機械などだけでは測れません。この7年間センターで働くプロの人たちに囲まれて、支えられてきた私はこのような運命を、何をして勝ち取ったのかと、いまだに疑問に思うことがあります。まずは、事務室の方々に頭を下げて感謝します。分からないことがあったらいつも教えていただける中嶋さん、編集室のアルバイトをしていた時に頼りになった亀田さん、私の海外調査の手続きをいつも助けていただいた坂口さんに感謝します。"Все будет хорошо"(大丈夫、すべてうまくいくんだ!)と書かれた編集室の大須賀さんの Т シャツを見るたびに元気をもらっていました。大須賀さんは近年体調不良が続いているのですが、"Все будет хорошо"と伝えて、感謝したいと思います。

そして、私の研究活動を最初から見守っていただいて、いつもインスピレーションを与えてくださった長縄先生に感謝します。実は、私の歴史への本当の興味は長縄先生のゼミで生まれたと言って過言ではありません。前期・後期でロシア帝国について有名な話題作を中心に、丁寧に、じっくり議論する長縄先生のゼミは永遠に印象に残ると思います。

最後に、指導教員の宇山先生に対して単に「ありがとうございました」と言っても足りない気がします。勝手な解釈かもしれませんが、この7年間同じ屋根の下で宇山先生の学問への忠誠心と真実への絶えざる追求心を見てきたからこそ、その経験から力とモチベーションを得て、私も博士論文の最後まで歩むことができたと思っています。宇山先生と一緒に研究できたことは私にとって貴重な経験でした。この場を借りて、心の底からお礼を申し上げます。

(2022年11月3日)

編集部だより

『スラヴ研究』

『スラヴ研究』第69号が8月末日に無事に出版されました。出版まで長らくお待たせしたことをお詫びするとともに、ご投稿くださった方々、査読にご協力いただいた方々に改めて深くお礼申し上げます。第70号については、投稿が8月末に締め切られました。研究ノートと論文を合わせて9件の応募がありました。現在、2023年初夏の出版を目指して厳正な審査を行っております。[青島]

Acta Slavica Iaponica

次に刊行予定の43号では、以下にあるような論考を掲載することになります。校正作業を 鋭意進めておりますが、編集体制が現在変則的な状況にありますので、通常よりも時間を要 しております。

本誌は、センターに滞在する外国人研究員の投稿に多くを負っていますが、コロナ渦で過去2年ほど滞在者がほとんどいませんのでしたので、44号への投稿は激減してしまいました。これを受けて44号では、通常の論考に加えて、ウクライナ戦争を契機に国際的にも議論が沸騰している、ロシア史/ソ連史の見直しと今後の課題について、誌上ラウンドテーブルなどを企画しています。[長縄]

Articles

Maria Rubins, "Homo ideologicus? Writing on the Fringes of Political Correctness in Russian Israel"

Rozaliya Garipova, "Bringing Order to the Muslim Family: Aleksandr Golitsyn and Imperial/Colonial Law for the Muslim Family"

Laada Bilaniuk, "The Trajectory of Language Laws in Ukraine: Inclusions and Omissions in Naming and Categorization since 1989"

Akifumi Shioya, "Shi'ite Captive Release Negotiations in Khiva: A Nexus of Khivan-Iranian and Anglo-Russian Relations"

Daniel Prior, "Generic Factors and the Context of Empire in Kirghiz Oral Heroic Poetry from the Mid Nineteenth to the Early Twentieth Century"

Никколо Пианчола. Маки для большевиков: опиум на туркестано-синьцзяньском приграничье в 1914—1929 годах

Lecture

Татьяна Вендина. Старославянский язык как моделирующий фактор русской культуры

Book Reviews

Андреев А.А. Пребываю верным слугою Вам моему Государю, князь Александр Черкасский. СПб.: Наука, 2020. 239 с. (Ульфат Абдурасулов и Паоло Сартори)

Michael Moser, "Юности честное зерцало" 1717 г. У истоков русского литературного языка. Wien: Lit 2020, 454 S. (Игорь Даценко)

Rebecca Gould, Writers and Rebels: The Literature of Insurgency in the Caucasus (New Haven, CT and London, UK: Yale University Press, 2016), 247 p. (Emily Laskin)

Tetsu Akiyama, The Qirghiz Baatir and the Russian Empire: A Portrait of a Local Intermediary in Russian Central Asia (Leiden: Brill, 2021), 144 p. (Aminat Chokobaeva)

Ewa Golachowska, Conversation with God: Multilingualism among the Catholics in Belarus in the Late Twentieth and Early Twenty-First Centuries. Sociolinguistic Study (Translated from Polish by Benjamin Koschalka) [Sprach-und Kulturkontakte in Europas Mitte. Studien Zur Slawistik und Germanistik, Band 12] (Berlin: Peter Lang, 2020), 242 p. (Shiori Kiyosawa)

Dirk Uffelmann, *Vladimir Sorokin's Discourses: A Companion* (Boston: Academic Studies Press, 2020), x+225 p. (Takashi Matsushita)

Nancy Condee, Alexander Prokhorov, and Elena Prokhorova, eds., *Cinemasaurus: Russian Film in Contemporary Context (Film and Media Studies)* (Academic Studies Press 2020), 330 p. (Masaru Ito)

Ali Askerov, Stefan Brooks and Lasha Tchantouridzé, eds., *Post-Soviet Conflicts: The Thirty Years' Crisis* (Lanham, MD: Lexington Books, 2020), xxii+376 p. (Helge Blakkisrud) Response to the Review by Dr. Aminat Chokobaeva (Tetsu Akiyama)



センター協議員会

2022 年度第 6 回 7 月 26 日(火)(オンライン開催) 議題

- 1. 令和3年度支出予算決算(案)について
- 2. 令和3年度支出予算配当(案)について
- 3. 内規の制定について
- 4. 教員の兼任について
- 5. 研究生の受け入れについて(再)

- 6. 特別研究学生の受け入れについて
- 7. URA 職の導入について

2022年度第7回 9月15日(木)~27日(火)(メール会議)議題

1. 内規の制定について

みせらねあ

センターの役割分担

2022年度のセンター教員の役割分担は、本来前号に掲載すべきものでしたが、手違いにより掲載できなかったことをお詫びします。11月初め現在の役割分担は以下の通りです。

[野町・編集部]

センター長	野町
副センター長	仙石・ウルフ
拠点運営委員会委員	岩下・宇山・仙石・長縄・野町
【学内委員会等】	
教育研究評議会、部局長等連絡会議、部局長等意見交換会	野町
教務委員会	野町
図書館委員会	田畑
国際担当教員	ウルフ
RJE3学内運営委員会およびカリキュラム検討専門委員会	田畑・安達
低温科学研究所拠点運営委員会	野町
北極域研究センター運営委員会	田畑
男女共同参画委員会	岩下
社会科学実験研究センター運営委員会	田畑
サステナブルキャンパス推進員	青島
ハラスメント予防推進員	岩下
広報担当者	宇山
共同利用・共同研究拠点アライアンス運営委員	長縄
アイヌ・先住民研究センター運営委員(新設)	青島
【学外委員会等】	
国立大学附置研究所・センター会議	野町
国立大学共同利用・共同研究拠点協議会	野町
JCREES事務局	野町・諫早
地域研究コンソーシアム理事	野町
地域研究コンソーシアム運営委員	仙石・諫早
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点運営委員	宇山
ICCEES情報	青島

	T
【センター内部の分担】	
大学院講座主任	仙石
教務委員	青島
入試委員	田畑
総合特別演習担当	(前期)岩下(後期)長縄
全学教育科目責任者	青島
全学教育科目総合講義	長縄
全学教育科目演習	仙石
文学院授業	ウルフ
国際交流科目	ウルフ
将来構想	宇山・仙石・長縄・岩下
点検評価	長縄・宇山・岩下
夏期シンポジウム	長縄・安達・諫早・非常勤研究員
冬期シンポジウム	田畑・後藤・村上・非常勤研究員
図書	田畑・兎内・岩下
情報・広報	宇山・服部・諫早・非常勤研究員
予算	田畑
共同利用・共同研究公募	長縄
	服部
外国人研究員プログラム	安達・ウルフ
デブラシオ	安達
グリンバーグ	野町
ホダルコフスキー	宇山
ボヤノフスカ	安達
マタソビッチ	野町
ムーン	 諫早
	青島
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	仙石
中村・鈴川基金	仙石
百瀬基金	岩下
公開講座	<u>台『</u> 青島・諫早・非常勤研究員
公開講演会	月島・課半・非常勤研究員 長縄・諫早・非常勤研究員
公開講演云 専任研究員セミナー(助教・非常勤研究員セミナーを含む)	
	宇山
その他研究会・講演会	安達・諫早・非常勤研究員
クロスアポイントメント教員(人事対応)	岩下
共共拠点三研究所・センター交流(東南アジア研・AA研)	岩下・長縄
生存戦略研究ユニット	長縄・岩下
サマースクール	田畑・諫早
研究所一般公開	諫早
博物館展示	岩下・井上
NIHU東ユーラシア(NIHUセミナー、HP、オンライン報告書)	岩下・井上
UBRJ(HP、 『境界研究』)	岩下
その他諸行事企画	安達・諫早・非常勤研究員
雑誌編集委員会	安達・宇山・ウルフ・長縄・青島
Acta Slavica Iaponica	長縄・ウルフ

『スラヴ研究』	青島
スラブ・ユーラシア叢書、SES、研究報告集	安達
ニューズレター和文(メルマガ・HPコンテンツ)	宇山(・野町)・非常勤研究員
ニューズレター欧文(メルマガ・HPコンテンツ)	ウルフ(・野町)・非常勤研究員

専任研究員消息

野町素己研究員は、7月8日~7月19日の間、資料収集、研究打合せのため、ブルガリア(ソフィア)、セルビア (ベオグラード)に出張。9月24日~10月3日の間、資料収集、講演のため、セルビア (ベオグラード)に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は、7月31日~9月22日の間、資料収集のため、アメリカ (ニューヨーク)に出張。

青島陽子研究員は、9月4日~9月17日の間、資料収集のため、ポーランド(ワルシャワ)、ラトビア(リガ)に出張。

宇山智彦研究員は、9月9日~9月28日の間、インタビュー調査、資料収集、講演のため、カザフスタン (アルマトゥ、アクタウ、アスタナ、オスケメン、セメイ)に出張。

田畑伸一郎研究員は、9月11日~9月22日の間、聞取り調査、現地調査のため、ノルウェー(トロムソ、ハンメルフェスト)、フィンランド(ヘルシンキ)に出張。

長縄宣博研究員は、9月24日~9月30日の間、国際ワークショップ「Russia's Muslims and Global Radicalism」出席・研究報告、Commission for the Study of Islam in Central Eurasia年次大会出席、研究打合せのため、オーストリア(ウィーン)に出張。 [事務係]

目 次

研究	の最前線1
	2022年度冬期国際シンポジウム「永久凍土:気候変動と資源開発は北極域の生活をどう変えているのか」の予告/2022年度夏期国際シンポジウム-2「ロシアにおけ
	るメロドラマとメロドラマ的想像力:新しい視点」を開催/ディビッド・ウルフ教授が
	フンボルト賞を受賞/人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「東ユーラシア研究」プロジェクト始動/北大総合博物館展示「ボーダーツーリズム」リニューアル
	/研究」ノロジェクト始動/北人総古暦初館展示「ホーダーノーリズム」リーュー/ル /ArCS IIによる北部ノルウェーの調査/セルビア学士院セルビア語研究所との部
	局間協定締結/2022年度中村・鈴川基金奨励研究員の決定/第2回百瀬フェロー
	の決定/清沢紫織非常勤研究員が北大部局横断シンポジウムで受賞/第17回スラブ言語学会(SLS-17)を終えて/キルギス共和国日本語教師会による国際研究大会
	の開催/専任研究員セミナー/研究会活動
人事	の動き
, , ,	服部倫卓教授の着任/教員・研究員の異動/事務職員の異動
学界	短信19
	学会カレンダー
大学	院修了者の声19
	大学院での7年間 byベクトゥルスノフ・ミルラン
編集	室だより22
	『スラヴ研究』/Acta Slavica Iaponica
会議	23
	センター協議員会
みせ	らねあ ······24
	センターの役割分担/専任研究員消息

2022年11月14日発行

編集 宇山智彦

編集協力 ベクトゥルスノフ・ミルラン

DTP 編集ささやめぐみ発行者野町素己

発行所 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目

Tel.011-706-3156、706-2388

Fax.011-706-4952

インターネットホームページ: http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/